◆ 特別講演

コロナ禍のブラジルから
映像作家の巣ごもり時空紀行

岡　村　　淳

《こんばんはおはようございます／まずはラテでも一杯》

日本で視聴されている皆さん、こんばんは。ブラジルで視聴されている皆さん、おはようございます。その他の地域の皆さんには、さて日本語には時間を考慮しないで使える適当な挨拶がありましたでしょうか？

僕は現在、ブラジルのサンパウロにおります記録映像作家の岡村淳です。

日本とサンパウロの時差はちょうど12時間。こちらが遅れていますので、日本時間の午後8時は当地の午前8時です。サンパウロは南半球の南回帰線のほぼ真下にあり、このライブ講演実施の西暦2020年12月10日の季節は真夏です。昼夜も季節も日本の真逆になります[1]。

今から2か月ほど前に日本の「立教大学ラテ研」というところから、オンラインでの講演依頼のメールをいただきました。ラテ研というから、カフェラテの研究をしているところだろうと思って、コーヒー大国ブラジルとコーヒー農園の労働者として渡った日本人移民の話でもすればいいのかなと思ってお受けすると…、なんとラテはラテでもラテンアメリカの研究所だったと気づいた次第です――。

というのは冗談で、僕は前世紀末の1997年に立教ラテ研主催で僕の最初の自主制作作品『生きている聖書の世界 ブラジルの大地と人に学ぶ』などの上映会を開いてもらっています[2]。

当時はラテ研とカフェラテをかけるようなダジャレもなかったな、と思って調べてみました。そもそも僕の子供の頃はミルクコーヒーどころか「コーヒー牛乳」という言葉になじんでいました。

30数年前にブラジルに移住する頃にも、カフェラテという言葉は日本で聞かなかったと思います。

それもそのはず、「カフェラテ」の語は1996年にコーヒーのチェーン店「スターバックス」が日本に進出してから使われ始めたようですね。2020年10月の時点で日本国内にスタバは1500店以上もあるそうですが、1997年3月の時点ではわずか5店のみで、カフェラテの語はオヤジギャグに使うほどには浸透していなかったわけです。「オヤジギャグ」という言葉も僕がブラジルに移住する20世紀末の時点では聞いた覚えがありません。この語の起源についてはネットで検索してみてもよくわからず、今後の研究を待ちたいと思います[3]。

《縄文・ナメクジ・大アマゾン》

さて、簡単に自己紹介をします。僕はマイケル・ジャクソンやマドンナと同じ年の生まれです。東京の目黒で育ちました。中学・高校時代は映画三昧で、大学では考古学を専攻して縄文文化と現代の私たちとの関係を探っていました。

卒業後、日本映像記録センターというテレビのドキュメンタリー番組の制作会社に入社します。日本のTVドキュメンタリーのパイオニア・牛山純一プロデューサーが日本テレビから独立して築いた会社です。当時、日本テレビ系列で放送していた番組『すばらしい世界旅行』の制作チームに僕は配属されました。この番組は日本の海外ロケ番組の草分けで、世界各地の少数民族の生活や野生動物の生態などを「お茶の間」に届けました。「お茶の間」という家族団らんでテレビを見る空間も見る習慣も、もはや過去のものになってしまったようですが。

新人の僕はまず動物取材、特にゲテモノといわれるような生物の取材を命じられました。僕が最初に関わる生物は…、その名を聞くと、多くの方のヒンシュクを買いそうですが、ラテ研との関わりもある生物ですので、あえてお話しします。処女作のタイトルは「ナメクジの空中サーカス 廃屋に潜む大群」、シンガポールで取材しました。

この作品が縁で僕は「ナメクジに人間が学ぶ」ことを提唱する日本の「ナメコロジー研究会」（略称ナメ研）に所属し、日本のナメクジ事情にも少しは通じています。日本でナメクジを見れば、その種類から周囲の植生が本来のものに近いかなどの見当がつきます。

日本のナメクジ相は、人類の歴史区分でいう近現代に激変しました。第二次大戦後にチャコウラ（茶甲羅）ナメクジという外来種が都市部に一気に拡がりました。この外来ナメクジがラテに関連するのですが、カフェにたかるわけではありません。ラ米の方です。

ラテンアメリカのラテンは「イベリアの」という意味で、ラテンアメリカとは南北アメリカ大陸のなかでイベリア半島のスペインとポルトガルの植民地だった地域を指します。そして意外なことに、この日本の新参のナメクジはイベリア半島が出身地なのです。イベリコ豚ならぬ、イベリコナメクジですね。

イベリコナメクジは人の移動とともにまず北米大陸に渡り、さらに第二次大戦の敗戦国日本に米軍とともに進駐してきたとみられています。米軍将兵の家族が持参した鉢植えにでも潜んでいたのかもしれません。

マラッカには甲羅に十字模様のあるカニがいて、イエズス会のフランシスコ・ザビエルにちなんでザビエル蟹と呼ばれているそうですが、チャコウラナメクジの甲羅は被膜：スクリーンに覆われています。スクリーンで身を覆う生物とは、ますます映像屋をうっとりとさせてくれます。ちなみにこの甲羅は、祖先がカタツムリだった頃の殻の痕跡です。

さて、『すばらしい世界旅行』で特に視聴率が高かったのが大アマゾンシリーズでした。いまやアマゾンというとドットコムの方が当たり前になってしまいましたが、南米の大河アマゾン川とその流域の熱帯雨林地帯の方です。ちなみにアマゾン川はざっと南米5か国を流れますが、流域面積の6割以上はブラジル領です。

当時は「裸族」という言葉を使っていましたが、この地域の先住民、ブラジルでインディオと呼ばれる人たちを記録したものが「お茶の間」で大好評だったのです。まさしく命がけの取材を

続けた担当の豊臣靖ディレクターは、自ら画面にも登場して視聴者の人気を博していましたが、50歳にして夭折しました。

そもそもブラジルは撮影機材の持ち込みがむずかしく、先住民保護区の立ち入りと撮影には国立インディオ局の特別な許可が必要です。これまでアフリカを担当していた杉山忠夫ディレクターが豊臣さんの没後にブラジルに乗り込み、これらの交渉にあたりました。ようやく新たな見通しがつき、その機会にふたつの取材班でアマゾンものを撮りまくろうということになり、若輩の僕も現地入りを命じられました。

僕の取材班の成果はほとんどボツとなり、鬼より怖い牛山プロデューサーから「テメエみたいな無能な奴ははじめてだ！」となじられました。しかしどうしたことか翌年も僕はアマゾンに派遣されました。一度、南米に送られると滞在は約半年近くとなり、これが毎年のこととなりました。僕は大アマゾン、ブラジル、南米大陸の底知れぬ多様性に魅せられ、無能なりにもドキュメンタリーを紡ぎ続けるには現地に住むしかないな、と決断します。

こうしてまだ20代のうちに、特にあてもないままブラジルに移住してしまいました。その後もフリーランスとして日本のTVドキュメンタリーの制作を手掛けていましたが、試行錯誤を重ねて小型ビデオカメラを使ったひとり取材を行なうようになり、今日に至っています。

僕は自主制作したものをテレビで放送したり、DVDを販売するなどはせずに、自分の立ち会う上映会のみに提供するという原則を貫いてきました。しかしこの度のコロナウイルスのパンデミックで、そうも言っていられなくなっているところです。

《サンパウロと立教大学》

ここサンパウロは、南米大陸のみならず南半球最大の都市です。大サンパウロ圏の人口は約2700万人。この度、サンパウロと立教大学の意外な関係に気づいたのですが、まずブラジルと日本の遠くて近い関係についてお話ししましょう。

日本では戦国時代の西暦1543年にポルトガル人が種子島に漂着して、その6年後にはイエズス会士のザビエルが鹿児島に到来します。こうして日本は南蛮文化の時代を迎え、世界の大航海時代のなかに組み入れられていきます。

ザビエルらが1534年に創設したイエズス会は、アメリカ大陸でもミッションを推し進めます。1500年にポルトガル人のカブラルが率いる艦隊が現在のブラジル北東部に到達し、ザビエルの日本到着の5年後の1554年にイエズス会士のアンシェッタらが南米の海岸山脈地帯に布教の基地を設けます。その記念のミサがたてられた1月25日はカトリックの暦で新約聖書の著者のひとりであるパウロの「回心の日」にあたるため、この地はサン（聖）パウロと名付けられました。

さてわれらが立教大学の現在の英語名はRikkyo Universityですが、「スクール・ニックネーム」として、St. Paul's の名称もあります。St. Paul は聖ポール：パウロのことで、立教の創設者ウイリアムズ主教が聖パウロを守護聖徒として仰いでいたことにちなんだとされています。

多くの皆さんはパウロやポールという名前の有名人は何人か浮かんでも、聖パウロその人についてはイメージがわきづらいことでしょう。この講演の最後に聖パウロに登場してもらうつもりです。

《コロナ禍のブラジル／死者数とワクチン数》

今回、ラテ研さんにいただいた講演のお題は「コロナ禍のブラジルに関すること」でした。ブラジルのコロナ事情の前に、ブラジルよりずっと発生源に近く、早く感染が広まった日本の当初の経過をおさらいしましょう。

2020年1月16日、日本国内で初の新型コロナウイルスの感染者が確認されました。神奈川在住で、中国武漢に滞在歴のある30代の男性です。2月13日には初めての死者が確認されます。これも神奈川で80代の女性ですが、感染ルートは不明のようです。3月24日には7月から開催予定の東京五輪・パラリンピックの一年延期が発表され、翌日には東京都知事が緊急会見で週末の不要不急の外出自粛を要請します。

さて僕は近年、頻繁に訪日していまして、この時期は日本にいたのです。3月27日に離日の予定でしたが、予約便はキャンセルされて二転三転。空港は成田から羽田に変更され、窓口は混乱を極め、かろうじて日本を脱出しました。ロックダウン中のニューヨークで乗り継ぎ、何度もヒヤリとさせられながらも、異常に閑散としたサンパウロ国際空港にたどり着きました。

ようやく家族の待つブラジルに戻ったものの、それからブラジルは世界最悪レベルのコロナ大国へと突き進んでしまいました。

ブラジルの「コロナ大国への歩み」をざっとご紹介します。

日本に遅れること40日、2020年2月26日に最初の感染者が確認されます。サンパウロ市在住の、当時の僕と同じ61歳の男性です。この人は中国ではなく、イタリアからの帰国者でした。3月16日には最初の死者が確認されます。57歳の女性で、サンパウロ市内の病院で亡くなりました。

いっぽう3月24日にはブラジルの公用語のポルトガル語でquarentenaと呼ばれる不要不急の商業活動を規制する政令がサンパウロ州で出されました。――これが再三再四の延長を繰り返し、この稿をしたためている翌年5月になっても続いています。

最初の死者確認から3か月足らずでブラジルのコロナによる死者数は、イギリスを抜いてアメリカ合衆国に次ぐ世界第2位となりました。この時で死者数は4万人を超えました。日本ではその翌年の4月にようやく死者1万人に達しています。これは日本でも報道されているようですが、ブラジルがあっという間に日本を抜いてコロナ大国となってしまった原因のひとつが、ボルソナロ大統領の言動だといわれています。コロナを「ちょっとしたカゼ」と言い切り、自ら規則に反して公共の場でもマスクを着けず、医師である保健担当大臣が続けて辞任し、国の保健行政のトップが空席という事態が長く続きました。そして7月には大統領本人がコロナに感染し、夫人と長男も感染が明らかになりました。夫人の祖母はコロナで亡くなっています。

僕は毎日、ブラジルのコロナ関係のデータを書き留め続けていますが、絶望を感じたデータを紹介します。2021年4月6日、日本では公立学校始業式の日のブラジルの数字です。24時間のブラジル全国の死者数は4211人。ここサンパウロ州だけで1389人。この時点で世界のコロナによる死者の4人に1人以上がブラジル人となりました。翌日のブラジルの全死者数は34万人を超えました[4]。

死者数だけでおおまかに比較すると日本の死者総数が1万人に達した2021年4月26日の段階で、ブラジルの死者数は39万人を超えています。日本の人口は約1億2千万でブラジルは2億1

千万、ざっとブラジルが2倍として単純計算すると、人口あたりの死者数はブラジルが日本の約20倍になります。

ブラジルの悲惨な状況は日本のメディアにも取り上げられたようですが、僕は祖国日本の近未来を見るような思いもしています。両国のワクチンの接種状況について、わかりやすい2021年3月26日のデータを見てみましょう。日本の外務省がすべての国に不要不急の渡航自粛要請を出してから、ちょうど一年目です。2月17日から始まった日本国内のワクチン接種の総数は、この日までに822,869人。いっぽうブラジルではこの日一日だけでほぼ同数、808,643人にワクチンを接種しているのです！

先に触れた最悪レベルの死者を出した4月6日の段階で2000万人以上、ブラジル全住民の約10パーセントが第1回のワクチンを受けました。それでもブラジルのマスコミも市民もワクチン接種の遅れを声高に非難しています。ちなみに僕の妻は医療関係者で、妻の母は齢90代のため、ふたりとも3月はじめまでに2回のワクチン接種を終えました。

この原稿をしたためている時点で日本では国内でオリンピックのたいまつリレー真っ最中の段階ですが、ブラジルのワクチン接種は日本とは桁違いに進められています。これらの数字と状況は刻々と変化していますので、とりあえず以上の傾向を前提として先に進みましょう。

《コロナ禍ブラジルの日常》

2020年3月、活動規制令が出されたばかりのサンパウロに戻った僕は、非日常的な日常生活を始めました。行政もメディアも「Fique em casa（ステイ・ホーム）」をしきりに訴えます。「特に60歳以上は」と付け加えられていて、僕も該当します。外出は家族や世間の目をはばかることとなりました。

わが住まいはサンパウロ市南部の商業地区と住宅地の入り混じった地域にある全8棟、総住民数5000人近い高層住宅群の一角です。住民は経済的には中流で、築数十年を経て年寄りが多くなり、僕などは若手に入る方です。

ブラジルに戻って最初に驚いたのは、アパートのエレベーターのなかの何枚もの貼り紙です。「お年寄り、外出の困難な方、買い物の代行をしますのでどうぞ連絡を」といった内容で、管理事務所からのほか、個人名のものも複数ありました。日本よりずっと、そして自然体でお年寄りを大切にする社会だと改めて気づきました。

いっぽう高層住宅の前の大通りには、路上生活者たちが小屋掛けして住まうようになりました。多くの商店が閉まってしまい、その前の歩道は格好の場所なのでしょう。近くにこうした人たちの収容施設もあるのですが、「自由」を理由に路上の方を好む人が多いようです。この人たちの糞尿や煮炊きの火の不始末の問題、そして連れ犬が通行人を襲うといった事件も生じています。出前のデリバリーを装ったバイクに乗った強盗による被害も後を絶ちません。

WHOが新型コロナウイルスの流行はパンデミック（世界的流行）であると発表してから数か月でブラジルは日本とまさに桁違いの感染者、死者数を出してしまいました。その違いはどこにあるのかをブラジルの日常から考えてみます。

まず思い当たるのは、靴脱ぎの習慣です。わが家は自宅内では家族全員が土足を脱いでスリッ

パやサンダルを使いますが、一般のブラジル人家庭では土足のまま過ごすのが普通です。ヒトから拡散したウイルスの多くは地面や床に付着することが知られていますので、土足はまさしくウイルスを家庭内にデリバリーすることになりますね。

そもそもブラジルでは普通、玄関に靴脱ぎスペースがありませんから、わがアパートでは玄関の扉の外に靴底をぬぐう布を敷き、その上に靴を置く家庭が増えました。サンパウロ市内で屋外に靴を置くと盗まれたり、なかにサソリが入ってくるリスクがありますが、さすがにわがアパートではサソリの被害は聞いたことがありません。

日本人の僕にはブラジル暮らしが何十年になってもまだ違和感のあるのが握手、そして異性とのハグとキッスの習慣です。これらもウイルスの拡散にかなり貢献したでしょうが、コロナの蔓延とともに自粛されていきました。代わりの挨拶で、拳や肱をちょこんと相手に接触させるのが日常的な光景となっています。

ブラジル国外に出て、帰りにブラジルへ向かう飛行機に乗ると、機内のやかましさが耳をつんざきます。ブラジル人同士で大声の他愛もない会話が繰り広げられ、女性も含めて「おほほ」の真逆の「ギャハハ」といった豪快な笑い声が響き渡ります。大声と大笑いはさぞウイルスの拡散に貢献していることでしょう。

サンパウロでは地下鉄やバスの利用時のマスク着用が義務付けられました。いっぽうパンデミック以降、地下鉄に乗ると各車両に代わりばんこで物乞い、物売り、ミュージシャンらが乗り込んできます。鼻出しマスクに大声で口上をがなられたり、ヴォーカルを披露されてしまうのですが、拍手や施しをする人は常にいても、たしなめる乗客は見たことがありません。こうしたブラジル市民の「寛容」さも感染者を増やす一因かと思います。

さて、パンデミックを生きるブラジルのわが家族を紹介しましょう。

僕は以前から旅と取材の時以外は「主夫業」を専らとしています。妻は日系二世で、医療関係者。子供は一姫二太郎ですが、ふたりともブラジル生まれで、学生を終えて仕事に就いています。息子の方は外出制限令発令以来ホームワークを続け、妻と娘は感染状況によって職場に通ったり、自宅勤務になったりです。

あとでまたお話ししますが、いちフリーランスである僕は、この時期に訪問先の人と自分の家族にコロナ感染のリスクをもたらしてまで取材をする大義を見出すことができないでいます。

いっぽうこれまでに撮影は終えたものの、次の取材に追われて編集作業ができていない素材がいくつもあり、頻繁な訪日が続いて整理の追い付かない課題は山ほどあります。サンパウロのわが家にこもっていてもできる、そしてすべき作業には不自由しません。僕は事態が落ち着くまで、買い物や炊事などの「主夫業」の合間に自分の仕事をすることにしました。

《古くなっても新聞》

わが家ではサンパウロ発行のポルトガル語の日刊紙2紙、日本語新聞1紙の計3紙を定期購読しています。僕がブラジル移住した1980年代には3紙あった日刊の邦字紙もいまや『ニッケイ新聞』のみとなりました。

「日本スゴイ！」系の人たちが、世界で新聞の配達があるのは日本だけ、と自慢するのに接し

たことがあります。他の国のことは知りませんが、ブラジルのわが家にはどの新聞も宅配されています。ちなみにポルトガル語の新聞は一年を通して休刊日なしです。かたや邦字新聞の方は土日と祭日はお休みで翌日の配達はなく、さらに遅配欠配がしばしばです。

合わせて3紙も新聞をとっているのは僕の取材や書きもののネタ探しのためです。いっぽう訪日やブラジル国内の取材などで留守にしがちですので、未チェックの新聞はメートル単位でたまってきます。量的にも恐怖ですが、歳月とともに古新聞の山のなかに紙魚（しみ）やシロアリ、それらを捕食するクモなどが棲みつき、独自の生態系が築かれていきます。僕以外の家族は虫嫌いですし、狭い住まいをさらに狭くする古新聞への苦情が臨界点に達していたので、今回のコロナ蟄居とともに新聞スクラップ作戦にかかりました。

ネットには引っかからず、見逃していた意外な記事もいくつか発掘しましたので、それらをもとにステレオタイプなブラジル像を突き崩すような話題を紹介しましょう。サンパウロで巣ごもりしながら、古新聞のオフライン記事から突入する時空紀行です。

《ブラジルの国土・生物・人のサプライズ》

さて、日本とブラジルは国としてどちらの方が古いでしょう？

なにをもって国とするかで違ってくるでしょうが…日本という名称の使用は西暦7世紀後半に始まり、ブラジルという名称は17世紀からとされています。

ヒトの居住の始まりではどうでしょうか？ これは考古学上の新発見によって、どんどん変わっていきます。ブラジルでは1万年以上前は確実とされ、僕の知る考古学者は10万年前までさかのぼると言います[5]。いっぽう日本では…西暦2000年の旧石器遺跡捏造事件の発覚までは70万年前とされていました。日本の考古学界とマスコミが科学的、そしてグローバルな視点と批判精神を置き去りにして日本列島最古の人類をより古くすることに熱を上げていたのです。そのでたらめさは新聞報道によって暴かれて、日本の歴史の始まりは空白に戻されます。その後の発掘で、島根県出雲市から12万年前という石器の発見が報告されています[6]が、とりあえず最初に人類がアフリカから到達したのは南米大陸より日本列島の方が先になりそうです。とはいえ、ケタ外れに日本がスゴく古くなることはないと思います。

ここで時間軸をひとっ飛びします。日本とブラジルの「国土」はどっちがどれぐらい古いでしょうか？

21世紀に入って日本最古の地層が発見されました。2014年にさらに古く「更新」されています。その場所をご存じですか？ かつてのゴンドワナ超大陸の東端、現在の茨城県北部の日立市の多賀山地で、5億3千万年前、古生代のカンブリア紀のものです[7]。

かたやブラジルは国土の大半が先カンブリア紀（地球生成から5.5億年前まで）の成立です。地球の誕生は46億年前、生物の登場は38億年前。そもそも日本列島が大陸から完全に切り離されたのは150万年前以降のことです。地質学的にはブラジルの方が圧倒的に老舗ですね。

さて、ここでウイルスの話題です。今回のコロナ騒動で、皆さんもウイルスとは何かについて、多少は認識を深めたことでしょう。ウイルスは地球上に約30億年前には存在していたとみられています。ウイルスは特定の生物の体内でしか増殖することはできません。つまり30億年前に

はなにかの生物に寄生していたわけですね。

2018年のこちらの新聞の科学欄に驚きの記事がありました。コロナが問題になる前のものです。「世界最大のウイルス類をブラジルで発見」という見出しです[8]。

トゥパンウイルスと名付けられたブラジルの巨大ウイルスの大きさは2.3ミクロン。コロナウイルスの大きさは0.1ミクロンですから、極小の世界での巨大さがうかがえますね。ブラジルで2種の巨大ウイルスが発見されたのですが、いずれも尋常な場所ではありません。一か所はパンタナール大湿原にあるアルカリ性で塩分濃度の高い沼です。もう一か所はリオデジャネイロ沖の海面下3キロの地点。こうした環境は、ウイルスが誕生した頃の地球の初源の状態をほうふつさせます。これらの巨大ウイルスがそれぞれどんな生物に寄生するのかはまだわかっていません。ブラジルはウイルスの世界でも巨大で、しかもナゾだらけです。

最後にブラジル人の「はだいろ」にまつわる話題を紹介しましょう。まずブラジル人の成り立ちについて、ざっくりとお話しします。南北アメリカ大陸には、数万年前にアジアからとみられる人たちがおそらく何世代もかけて渡ってきました。現在のブラジルの国土には16世紀にヨーロッパ人たちが到来します。彼らはインディオと呼んだ先住民のほかにも労働力を必要として、数百万人単位の人たちをアフリカから強制連行してきます。19世紀後半には奴隷の解放が実施されて、それに代わる労働力としてヨーロッパから、そして20世紀には日本からも移民が渡ってきます。そのほかジプシーからナチスまで、さまざまな時期に多種多様な人たちが諸般の事情でブラジルに渡ってきました。

さて、現在のブラジルを肌の色で見てみましょう。ブラジル地理統計院（IBGE）の統計をもとにします[9]が、僕もこの調査を抽選で指名されて受けたことがあります。自分の肌色は何色かを自分で決めて調査員に告げるのです。色見本があるわけではありません。選択肢は、• 白（42.7）• 褐色（46.8）• 黒（9.4）• 黄およびインディオ（1.1）があり、僕は一番最後のにしておきました。それぞれの丸カッコの数字は2019年の統計のパーセントです。褐色、つまり自分のルーツは白人も黒人もミックスされているというアイデンティティを持つ人が全住民の半数近くにおよんでいることがわかります。

ブラジル人は、どのように混じり合ってきたのか。これについて最新のDNAの研究がショッキングなデータをもたらしました。

これも新聞の科学欄からで、見出しは「遺伝子の証拠がブラジルの暴力的な過去を物語る」[10]。穏やかではありませんね。1000以上のブラジル人の遺伝子の母方と父方の人種的比率を調べたものです。

母方は、• アフリカ系36%　• 先住民系34%　• ヨーロッパ系14%

父方は、• アフリカ系14.5%　• 先住民系0.5%　• ヨーロッパ系75%

16世紀以降、ヨーロッパから渡ってくるのは聖職者から囚人まで男ばかりで、先住民や黒人奴隷の女性を性のはけ口にした、といわれてきましたが、現在のブラジル人の遺伝子がそれを無言のうちに語っていました。この記事の解説には「DNAからみるレイプ？」という見出しがありました。

《映像で人は殺せるか》

僕は記録映像作家という肩書を名乗っています。コロナ禍のブラジルのひどい状況を日本のニュースで見た知人から「オカムラさんはさぞコロナの取材で忙しいことでしょう」という、僕としてはピントはずれな連絡がありました。

いちフリーランスの僕がこの時期に誰かの取材に行くとします。もし僕が取材対象の人、ないしご家族や周囲の方にコロナを感染させたとしたら？ また僕が取材先で感染して、わが家族に感染させてしまったら？ 僕にどのような責任が取れるのだろうか？ そのような、他人と自分の家族の生活どころか生命も脅かすリスクもある取材をする大義を見い出せないのです。

写真：スチールにしろ、映画：動画にしろ、そもそも撮影そして取材という行為には暴力性が伴ないがちであることを、特に撮る側の者は肝に銘じなければなりません。さらに現在のように感染症が蔓延している状況では、また別の暴力性をも考慮しなければならないと思うのです。

写真でもムービーでも撮影することを英語でshootといいますね。獲物を撃つという、そもそもが攻撃的な行為です。しかし日本ではそれぞれの「撮り手」もその発表をつかさどるメディアも、そのことにあまりに無自覚にみえます。

僕はさる戦前移民の方の取材を通して、その人の日本に残った妹が仕えた名取洋之助という写真家のことを知りました。名取は日本のフォトジャーナリストの草分けです。彼は日中戦争の時期に、報道写真家が国策宣伝にいかに寄与しているかを訴えて積極的に協力します。当時の日本の内閣情報部が映像を武器ととらえていることを物語る記載を紹介しましょう。

「映画を宣伝戦の機関銃とするならば、写真は短刀よく人の心に直入する銃剣でもあり、何十万何百万と印刷されて散布される毒瓦斯（ガス）でもある（ルビ筆者）」。

これは1938年に内閣情報部が刊行し始めた週刊グラフ誌『写真週報』の第二号の「写真募集規定」の一文です[11]。

この時代に毒ガスと例えているのですから、もう少し時代が下れば核兵器にも例えられたことでしょう。国家が映像を、確信犯で大量殺人のツールとして駆使してかかってくる。個人の力では、もう拮抗しえないレベルだと思います。

ここで武器の歴史を考えてみましょう。機関銃や毒ガスの以前は刀や鉄砲です。刀は武士の魂といわれますが、「人斬り包丁」ともいわれます。美術品にはなりえても、しょせん殺傷のための武器だと思います。鉄砲弾の方はタマですので、われわれ映像屋の必需品であるレンズ玉とコトバとして重なります。さらにレンズ玉のタマは、まさに「武士の魂」の魂の「たま」と重なるものがあると僕は思います。

これに関して、思い当たる言葉がありました。僕自身が引用するのもおこがましいのですが、勉強不足で他に適当なものが浮かびません。畏友の編集者にして著述家の浅野卓夫さんの文章です。

「その眼差しを〈愛〉と呼びかえてもいいとぼくは思う。ブラジルに生きる移民たちの声の物語と、それを追い求める作家の旅との小さな出会いが生む、岡村淳のドキュメンタリー作品に、ぼくらは、映像が〈愛〉を実現させるメディアになりうることを、やさしい気持ちとともに発見するにちがいない。」[12] これは2002年に発表されたもので、僕が今よりさらに無名だった時代です。

「たま」を凶器としてではなく、愛のメディアとして用いること。浅野さんはこの言葉を岡村の今後の課題、プレッシャーとして提示してくれたのでしょう。彼の名誉と友情のためにも、ますますいいかげんな取材や撮影はできかねています。

《ブラジリアングラフィティ開眼》

サンパウロで巣ごもり生活を始めて、妻子にはステイホームをうるさく言われましたが、必需品の買い物などを口実に、ほぼ毎日シャバに出ています。冬の竪穴式住居を出て、雪の覆う大地で採集狩猟をこころみる縄文人に想いを馳せます。

4月の祝日のことです。近くのアヴェニーダ（大通り）で建物の壁に描かれた真新しいグラフィティが目に入りました。サッカーのブラジル代表のユニフォームを着て、コーヒーカップ型の頭をした少年の絵で、COVID-19と書き添えられています。カップ頭やユニフォームとの関連がよくわかりませんが、新型コロナの啓発を図ったのでしょう。なにか感じるものがあり、僕はスマホを取り出してスナップ撮りしました。そして拡散すべきものとしてINSTAGRAMにアップしておきました[13]。さて翌日も外出の際、ちょっと面白いグラフィティが目に留まり、これも撮ってアップして…、といった調子が続き、これが日課になってしまいました。

さて皆さんは「グラフィティ」と聞いてある程度イメージがわきますか？ 僕はかつて映画少年でしたので、日本で1974年に公開された映画『アメリカン・グラフィティ』でこの言葉に出会いました。日本語に訳すと「落書き」ですが、ややニュアンスが違うように思います。「ウォールアート」という言葉もありますが、はじめからアートとされてしまうと、「落書き」のような身近さ、そしてある種のいかがわしさなどがかすんでしまうように思えます。

僕なりにアンチョコを見ないでグラフィティを定義づけてみると、「ほんらい絵を描くためにあるのではない場所に描く絵のこと」といったところでしょうか。世界的に知られるイギリスのバンクシーの作品とおぼしきグラフィティが2019年に東京で見つかって話題になりましたね。それが金額にしてハウマッチとか、その高名ぶりを行政が利用にかかるといった報道に僕はげんなりしたのですが。

日本でのグラフィティの理解度が、今回の立教ラテ研と僕のやり取りからうかがえそうですので、あえて記しましょう。この講演録の執筆にあたってラテ研の担当者から「写真も掲載可能」との連絡がありました。僕も映像作家ですから、それは望むところです。しかし「グラフィティの写真の著作権に関しては、日本ではグラフィティの作者にあると考えられていますので、作者の使用許可を取ってください」とのことです。

ブラジルでは（日本もそうでしょうが）描かれる場所の所有者の許可を得ていないグラフィティの作画は違法行為です。違法のものでなければグラフィティと言えない、とするグラフィティ作家もいるのですが、違法に描かれた絵画に著作権は存在するのでしょうか？

当地の著名なグラフィティ作家が「グラフィティは描かれた時から作者である自分を離れてパブリックのものとなる」と語っています[14]。ポルトガル語でグラフィティ作家をグラフィテイロといいますが、僕も少なからぬグラフィテイロとオンラインでつながり、また実際に出会ってきました。彼らの作品の写真をSNSで紹介すると「記録してくれてありがとう」と深く感謝こそさ

れ、見返りを要求されたことはこれまで一度もありません。

そもそもサンパウロのグラフィティ集中地帯で撮った写真には複数の作品が写り込み、それぞれの作者の同定と消息探しは容易ではありません。サンパウロのグラフィティの傑作のパノラマ化を図った『GRAFFITI SP』という労作の写真集がありますが、「作者不明」と記されたものが数多く収録されています。グラフィティの画像は、僕のインスタグラムで撮れたての作品の数々をお楽しみください[15]。

《グラフィティの時空旅行》

壁に描くという行為はヒトの体の構造にもかなっているようで、その起源はヨーロッパ各地や最近では東南アジアで発見の続く旧石器時代の洞窟壁画までさかのぼるでしょう。グラフィティは反権威的な文化：カウンターカルチャーのアートとして位置づけられることがしばしばですが、その意味では1968年のパリ5月革命の時にカルチェ・ラタンの壁に描かれ、貼られた諸々の表現が大きな嚆矢とされています。その後、グラフィティは1970年代のニューヨークのダウンタウンで流行するヒップホップ文化の要素のひとつとして世界に知られ、広まっていきます。

ブラジルには1980年代に米国から、そしてヨーロッパからもグラフィティが伝えられました。その先進地となったサンパウロでは違法行為としてグラフィテイロたちが検挙されていきます。なんと彼らは獄中でプロジェクトを立ち上げ始めました。州の文化局にはたらきかけて、公営のメトロが地上で高架になっている区間の橋桁にグラフィティを描くという計画です。これが実現となり、文化局とメトロ公社からスプレーの提供を受けることになりました。2011年にその区間はサンパウロ州立「都市アート野外美術館」とされます。世界初の都市アートの野外美術館です[16]。サンパウロ市内のベコ・ド・バッチマン：バットマン横丁と呼ばれる地区は一帯の壁一面がグラフィティで埋め尽くされていて、世界的な観光名所と化しました。いまやサンパウロは世界に名だたるグラフィティの聖地となりました。

今日ではサンパウロの繁華街のあちこちで巨大なグラフィティを見かけます。イベント屋さんなどが企業や行政、ビル所有者らを巻き込んでグラフィテイロを起用して、ビルの壁面に合法的に描かれたものです。メキシコの現代の大壁画をはるかにしのぐ、怪獣なみの巨大さに目を見張ります。しかし反権威の文化が権威に取り込まれてしまった感もあり、あまり僕の食指は動きません。治安も作画条件もよくない場所で、検挙されるリスクも抱えながら自分の描きたいものを描く。それらは美術館や画廊の収蔵品と違い、いつ消されてしまうともしれない。こうした本来のグラフィティの持つ一期一会の迫力に僕は魅かれます。

ここでブラジルのグラフィティの特色と問題点をあげてみます。まずグラフィテイロたちの言う「グラフィティは民主主義的だ」という言葉が浮かびます。画廊やキュレーターなどの権威やコマーシャリズム、そして流行におもねることなく、自分の表現を貫く。これこそアート本来のあり方だと僕は思います。

グラフィティを見る側からよく聞く声を紹介しましょう。巨大都市サンパウロは灰色のコンクリートジャングルであり、随所に監視カメラが設置され、防犯用の鉄条網が張り巡らされて殺伐としている。そんな街に様々なグラフィティが彩(いろど)りと潤いを与えている。グラフィティにはブラ

ジル人らしいユーモアと批判精神が込められていて、見る人にヒューマンな微笑みと生きる力を湧きあがらせてくれる…。

さて、グラフィティの問題点です。グラフィティのなかには、「ピシャソン」と呼ばれる暗号文字のようなものがあります。ピシャソンというのはポルトガル語ですが、そのまま英語でもピシャソンの語が用いられています。当事者とお仲間以外には判読不明のものが多いですが、描き手やグループの署名が大半のようです。アート表現というより、縄張りを表わすイヌのマーキングに近いかもしれません。表現の美醜を一般論で語るのは危険ですが、ピシャソンは見る者に不快感を与え、汚(よご)しに見えるものが大半です。無許可かつ不本意に自分の所有物や公共の空間に不快なものを描き込まれたら、たまったものではないでしょう。そして行政や官憲側からは、世界的に評価されているグラフィテイロの作品も過激な若者グループのピシャソンも同様のものとして処断されてしまいがちです。

もうひとつ、見る側にとっての問題点をあげます。すでに観光地となったバットマン横丁や大プロジェクトとして描かれたダウンタウンのビルを飾る巨大グラフィティなどの例外を除いた「伝統的」かつ一般的なグラフィティは、アクセスが安心安全とはいえない場所に多く描かれています。先にご紹介した高架の橋桁の野外ミュージアムは、路上生活者のテリトリーとなっています。かつてサンパウロで傑作が集中したのは自動車専用バイパスの法面(のりめん)で、車中で渋滞にでも遭わなければゆっくり見ることもむずかしい場所でした。自分で踏査してわかったことですが、グラフィティが集中するのはファヴェーラと呼ばれるスラムや路上生活者の占拠空間、ドラッグ取引き地区などと多く重なっています。

僕はアマゾン流域の奥地で、先史時代人の遺した岩絵遺跡を現地の考古学者らと調査をして歩いたことがあります。いちばんのリスクは岩絵の上に営巣するスズメバチの襲撃でしたが、毒蛇毒虫、風土病、移動中の事故など危険な要素はいくつもありました。

パンデミックとともに、わが家の近所も治安が悪化して強盗事件がひんぱんになりました。カモまる出しの日本人ヅラをしてスマホ片手にグラフィティ探しをしている今と、大アマゾンをさすらっていた頃とどっちの方が危ないか、むずかしいところです。

《黒人差別と喪の壁》

グラフィティの話の最後に、ブラジルのグラフィテイロたちの心意気がうかがえる最近のエピソードをお伝えします。

先にブラジルの人種的構成のデータをご紹介しました。よく「ブラジルには人種差別や偏見がない」と言われることがあります。しかし「ブラジルには人種差別がないという偏見がある」というのが実情です。高学歴・高収入者、テレワーク実施者などは人種の比率以上に白人系が高く、殺人事件の被害者からコロナの犠牲者まで黒人系が高くなっています。具体的な数字をあげてみましょう。殺人事件の犠牲者は75パーセント以上が黒人系および褐色の人です（西暦2018年）。新型コロナによる犠牲者では黒人系かつ無学歴の人は80パーセント死亡率が高まる、というデータもあります[17]。

パンデミックの規制の最中に衝撃的な事件が全国的なニュースになりました。ブラジルでは11

月20日が「黒人問題啓発の日」と定められています。1695年のこの日に、逃亡奴隷たちの築いた共同体のズンビというリーダーがポルトガル軍の攻撃で絶命したことにちなみます。ズンビは黒人解放運動の象徴とされてきました。

よりによってその前日に、反ダボス会議として知られる世界社会フォーラムが2001年に開催された南部の都市ポルトアレグレで事件は起こりました。全世界に1万2千店以上の店舗を持つフランス系のスーパーマーケットで黒人系の男性客と店員が言い争いになり、客は警備員に撲殺されてしまったのです。黒人系住民へのあからさまな偏見と暴力に対して全国的な抗議運動が展開されました。在サンパウロ日本国総領事館はこの事件についてのメッセージを在留邦人に送付しました。人種差別撤廃への共鳴かと思いきや、サンパウロでも行なわれているデモ活動に関して「デモ隊には近づかない等、最新の注意を払って行動してください」というお達しでした。

その後1週間ほどして、SNSにサンパウロのグラフィティの名所バットマン横丁が黒く塗りつぶされたという情報が流れてきました。この問題への抗議活動だと思いました。サンパウロ州の活動規制が続いている状態でしたが、僕は現場に行ってみることにしました。あの、ブラジルとそのグラフィティのカラフルさ、多様性を具現していたバットマン横丁のすべての壁が黒で塗りたくられていました。その上に抗議のメッセージが書きつけられています[18]。そしてこの抗議は、ポルトアレグレの後にこの付近で発生した黒人系のグラフィテイロを警官が殺害した事件に対するものだったのです。ネゴ（あえて邦訳すると「くろちゃん」）と呼ばれていた彼は仲間同士の争いの仲裁に入り、やってきた警官隊に射殺されてしまったのです。サンパウロのグラフィテイロたちが団結して、この抗議活動を行なったのでした。墨痕なまなましい黒い壁から、仲間をいたみ、訴えずにはいられない彼らのパッションが伝わってきました。

だれのための表現か。人影まばらなパンデミック下、平日午前中のバットマン横丁で、感極まった僕はひとり泣いていました。

《新聞写真のあの人は》

コロナ問題、大アマゾン、撮影という行為、新聞記事、と風呂敷を広げてきました。最後にこれらを網羅するひとりのブラジル人の近況を紹介しましょう。写真家のセバスチャン・サルガドさん。同時代でもっとも地球を歩いた人かもしれません。わが家の本棚では彼の何冊もの写真集がその重量自体でも大きなウエイトを占めています。彼の代表作のひとつ、アマゾンの露天掘りの金鉱にアリの群れのようにひしめく人々の写真などに見覚えのある人は少なくないでしょう。しかし試みに検索してみると、日本で彼の写真集は『人間の大地 労働』ぐらいしか出版されていないことに驚きます。いっぽう「サルガド」と日本語で検索にかけると、息を呑む写真がいくつも現れますので、ぜひ検索してみてください。

サルガドさんは1960年代、ブラジルの軍事政権時代に夫妻でフランスに渡ります。国際コーヒー機構のスタッフとしてアフリカに通い、40歳近くになって写真を始めます。以降の彼の撮影はまさしく地球全体におよびます。彼の写真からは、世界史からもメディアからも個人として取り上げられることのないだろう無数の人たちの持つ尊厳があふれています。

僕は1990年代にブラジルの土地なき農民運動の最前線の現場に通って取材を続けていました。

サルガドさんはこの運動も撮り続けていて、僕はその影響を受けています。

彼は『FOLHA DE S.PAULO』というサンパウロの日刊紙に特集記事で写真を発表してきました。すべて白黒写真です。先にあげた日本の報道写真家の名取洋之助は、組写真というかたちで複数の写真をストーリーに沿って並べてキャプションを施す手法を展開しました。いっぽうサルガドさんはあくまでも一枚一枚の写真で訴えてきます。僕は新聞の白黒印刷でこれほど迫力のある写真を他に思い当たりません。

サルガドさんが2013年から取り組んでいるのが大アマゾンの先住民問題です。2020年だけで計3回、各回が10ページにおよぶ写真の特集記事を発表しています。2019年にアマゾン西部のブラジルとペルーの国境地帯をテリトリーとするコルボという先住民の写真が発表された時は、たまげました。僕は1983年、はじめてのアマゾン取材の年にこの部族についての取材をしているのです。当時のコルボは謎の未接触部族とされ、非合法の材木業者らとの抗争が続いていました。接触活動をはかるインディオ局の職員がコルボに殺害される事件も生じました。僕の取材班は「白人」側の関係者に接触するのが精いっぱいで、コルボの人たちの痕跡にも近づくことはできませんでした。近年ようやくインディオ局が接触に成功し、さっそくサルガドさんは現場に向かい、密林のなかに築いた簡易スタジオでコルボたちが見せる友好的な表情をレンズでシュートしていたのです。

ブラジルのボルソナロ政権は先住民たちの既得の権限まで脅かす政策を開始しました。そこに新型コロナの問題です。先住民の保護は無策どころか、保健スタッフがウイルスを保護区内に持ち込むといった事例も報告されて、世界中から先住民のジェノサイドとして非難されています。

コロナ問題の発生とともにサルガドさんは自らが先住民に感染のリスクをもたらすことを考慮して撮影活動を中断して、さらにダイナミックな活動を始めました。彼の持つ世界的な人脈にはたらきかけて、ともにブラジルの先住民をコロナ禍によるジェノサイドから守ろうと訴える意見広告を世界各国の有力新聞に載せようという計画です。2020年5月3日付のFOLHA紙に掲載された共同声明に名を連ねる人々を見ると、僕と同じ年のマドンナ、そしてポール・マッカートニー、スティング、シルヴェスター・スタローン、ブラッド・ピット等々、そうそうたるものです。日本人は唯一、建築家の安藤忠雄さんが名を連ねていました。意見広告を載せる予定の世界の有力紙のなかに日本の新聞は見当たりませんでした。

こうした活動も圧力として功をなしたのでしょう、さらに米国のバイデン政権のアマゾン保護の訴えもあり、ブラジルでは先住民や黒人系の共同体などに優先的に対コロナのワクチン接種が行なわれるようになりました。

しかし僕がかつて生活をともにしながら取材して、サルガドさんも撮影している先住民ヤノマモの保護区内では、ガリンペイロと呼ばれる金採掘人が現在でも大挙して非合法の活動を続けています。彼らはヤノマモたちにワクチンについてデマを伝えて忌避させて、保健スタッフからワクチンを自分らに横流しさせているというニュースに愕然としているところです[19]。

僕はいまだ日本に伝わる気配のない大サルガドのアマゾンの写真を眺めながら、闇を照らすひかりを探しています。

《大アマゾンと日本政府》

先住民とその文化を含めた大アマゾンの生態系の持つ価値は計り知れないものがありますが、ブラジルのボルソナロ政権下ですすむアマゾンの熱帯林の破壊に胸が痛むばかりです。

その他のアマゾンがらみの最近のニュースをお伝えしましょう。日本でも知られるスウェーデンの環境活動家のグレタ・トゥンベリさんはポルトガルの財団から得た賞金をすべて環境団体などに寄付し、うち約1200万円をアマゾン地帯のコロナウイルス対策活動の資金として提供しました。この時で17歳の少女のお金の使い方にうっとりとしてしまいます[20]。

アマゾンの生物からも貴重な発見が報告されています。アマゾンの熱帯林で2011年に発見されたキノコが、プラスチックの主成分であるポリウレタンを食べて成長することが判明しました。プラスチック公害が地球全体の生物を脅かしているなか、まさしく生態系にも人類にも福音といえるニュースです。しかし残念ながらそれ以上の技術開発への投資が少ないのがネックだといいます[21]。

いっぽう国際貢献を高らかに自賛する日本政府はアマゾン保護の問題に関わっているのでしょうか？ アマゾンは日本から遠すぎて、なかなか…？ いえいえ、とんでもない。これから紹介するニュースを、日本でどれだけの人がご存じでしょうか。

2021年1月7日、日本政府は新型コロナ対策として2回目の緊急事態を宣言しました。この時期に日本の外務大臣はどこでなにをしていたでしょう？ なんと中南米外遊中で、1月8日には問題のボルソナロ大統領と茂木敏充外務大臣が二人ともノーマスクで握手を交わしている写真が公表されています。ブラジルの邦字紙は「当日は日本へニオブ（鉱物）輸出をする取り決めの他（以下略）」[22]と報じ、ニオブ輸出の取り決めがメインだったことがうかがえます。

レアメタルのニオブは、携帯電話やパソコンなどに用いるリチウムイオン電池の作成のため、そして水素燃料電池の素材として今後の需要拡大が見込まれています。ブラジルは世界で圧倒的なニオブの生産量を誇り、国内に複数の鉱床がありますが、アマゾナス州で未開発の大規模な鉱床が確認されています。世界中の様々な国の政府や企業、団体がアマゾンの乱開発に歯止めをかけようと奔走するなか、日本政府は新たな鉱山開発をもくろんでいるのです。

《聖パウロかく語りき》

パンデミックのコロナ大国ブラジル・サンパウロから想うままに時空を縦断してきました。そろそろ「現実」に戻って締めくくりましょう。オンライン講演の時はアマゾン先住民の大長老ラオニさんの言葉で締めてみました。

本稿では取材や調査をする側の問題も含めた、他者と関わる心得として、ブラジルの先住民保護の父とされるカンジド・ロンドン元帥の言葉を紹介しましょう。ロンドン元帥は日本では幕末の1865年の生まれで、僕やマドンナの生まれた年に亡くなりました。彼は先住民の血を引きますが、アマゾン探検の際に先住民に毒矢で射られた体験も持っています。

「Morrer, se preciso for. Matar, nunca.」：試訳では「必要とあれば命を捧げよう。決して殺してはならない」。

愛を唱え続けたイエス・キリストの言葉に重なります。先住民のジェノサイドをはかっている

と非難されるボルソナロ大統領も軍人出身ですが、まるで逆の方向を突き進んでいます。

僕は自分の用いるレンズ玉が愛すべき被写体への凶器となる懸念があるなら、レンズ玉を放棄することを選ぶ覚悟をしています。

本稿執筆の時点でコロナ禍はいまだ終息の気配どころか悪化、長期化も懸念されています。無力感、非力感を覚える方も少なくないことでしょう。

そこで最後にわがサンパウロとセントポール立教大学を結ぶ聖パウロの言葉を引用します。

「（前略）主は、『私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ』と言われました。だから、キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。（中略）私は、弱いときにこそ強いからです。」[23]

パウロは生前のイエスに出会うことはなく、キリスト教徒の迫害を続けます。あるときイエスの声を聴いたことから回心して、命がけのキリスト教伝道を続け、最後には殉教を遂げました。そのパウロが説く「弱さを誇り、弱さを力とする」こと。いまだ終局のみえないパンデミックのなかで、この言葉を考えてみることをお別れに提案します。

さて、今日もマスクを忘れずに聖パウロの町に出てみるとします。新たに思いもかけないグラフィティに出会えるかもしれません。

〈註〉

1　本講演録は日本時間西暦2020年12月10日に実施したオンライン講演の内容に沿って、新たに書き下ろしたものです。本稿では5か月後の脱稿時2021年5月までに入手した資料をもとに書き上げました。

2　『立教大学ラテンアメリカ研究所報』No. 26（1997）に立教ラテ研受講生OBの小説家・星野智幸さんの上映会レビュー「岡村淳氏の豊かさ」と上映作品リストが掲載されています。

3　本稿で参照したデータは多岐にわたるため、関心のある人が自分で検索すれば容易にアクセスできそうなものは出典明記を省略します。

4　ブラジル最大のテレビ新聞複合メディア「O GLOBO」のウエブサイトhttps://g1.globo.com/の日毎のデータに依拠。

5　ブラジル人の考古学者ニエデ・ギドン博士の提唱。
https://revistapesquisa.fapesp.br/niede-guidon/

6　『広報いずも』第110号（2009）参照。
https://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1254377945297/files/p1.pdf#search='%E7%A0%82%E5%8E%9F%E9%81%BA%E8%B7%A1'

7　日立市ウエブサイト『ひたち風』参照。
https://www.city.hitachi.lg.jp/citypromotion/hitachikaze/boasts/view/p093752.html

8　*FOLHA DE S.PAULO* 2018年2月28日付。

9　https://www.ibge.gov.br/

10　*FOLHA DE S.PAULO* 2020年11月1日付。

11　石川保昌著『報道時代の青春時代 名取洋之助と仲間たち』1991年、講談社、p. 140。

12　淺野卓夫著「岡村淳〈愛〉のメディア」『エクスタス』03（群像4月号増刊）2002年、講談社。
13　https://www.instagram.com/p/B_QEfPOAxsh/
14　阿部航太著『PAISAGEM DAS CIDADES 都市の風景』2019年。
15　https://www.instagram.com/junchan117/
16　https://museuabertodearteurbana.wordpress.com/
17　*O ESTADO DE S.PAULO* 2020年5月28日付。
18　https://www.instagram.com/p/CIWWB0zHBRF/
19　https://noticias.uol.com.br/colunas/rubens-valente/2021/04/13/associacao-yanomami-covid-vacinacao.htm
20　https://www.afpbb.com/articles/-/3294877
21　https://nazology.net/archives/87019
22　『ニッケイ新聞』2021年1月9日付。
23　「コリントの信徒への手紙」二 第12章第9～10節『聖書 聖書協会共同訳』2018年、日本聖書協会。

〈主要参考文献〉

赤瀬川原平ほか、1993、『路上観察學入門』、筑摩書房。
今橋映子、2008、『フォト・リテラシー――報道写真と読む倫理』、中央公論新社。
岩波書店編集部編、2008、『レンズ』岩波写真文庫――田中長徳セレクション（原版1950年）、岩波書店（復刻版）。
岡村淳、2013、『忘れられない日本人移民――ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』、港の人。
鈴木嘉一、2016、『テレビは男子一生の仕事――ドキュメンタリスト牛山純一』、平凡社。
山内一也、2006、『地球村で共存するウイルスと人間』NHKライブラリー、日本放送出版協会。
山本浩貴、2019、『現代美術史――欧米、日本、トランスナショナル』、中央公論新社。
Carlsson, Benke e Hop Louie. 2015. *Street Art. Técnicas e Materiais para Arte Urbana*, São Paulo: Gustavo Gili.
Czapski, Ricardo. 2018. *Graffiti SP*, São Paulo: Comg Editora.
Kulcsár, João. 2015. *Retratos imigrantes*, São Paulo: SESI-SP.
Salgado, Sebastião. 2014. *Da minha terra à Terra*, São Paulo: Paralera.
SESI-SP (ed.). 2013. *Graffiti fine art.*, São Paulo: SESI-SP.

（おかむら　じゅん　記録映像作家）

編集部註

❖ 立教大学は2009年度にそれまで使用していた英語名St. Paul's UniversityをRikkyo Universityに変更。現在St. Paul'sはニックネーム的位置付け。

❖ 註9の原データに該当すると覚しきブラジル地理統計院の表をここに掲出する。

Tabela 6408 - População residente, por sexo e cor ou raça	
Variável - Distribuição percentual da população por sexo segundo cor ou raça (%)	
Brasil	
Ano - 2019	
Sexo - Total	
Cor ou raça	
Total	100,0
Branca	42,7
Preta	9,4
Parda	46,8
Fonte: IBGE - Pesquisa Nacional por Amostra de Domicílios Contínua Anual - 1ª visita	

Notas
A categoria Total para Cor ou raça inclui as pessoas que se declararam indígenas, amarelas e ignoradas.

https://sidra.ibge.gov.br/tabela/6408

❖ 註14の阿部航太監督によるドキュメンタリー映画『街は誰のもの？――グラフィティ、スケートボード、雨宿り、カーニバル、そして政治参加まで　連なるブラジル・ストリートの記録』(2021、98分)は2021年12月東京にて一般公開された。